



感動を・ともに・創る

Musician's  
Synthesizer

# YAMAHA MOTIF

アーティストと歩んだ10年の軌跡



大容量の波形メモリーを搭載し、

多彩な機能を併せ持つワークステーション・シンセ、

MOTIFが登場したのは2001年のこと。

以来、ヤマハの最先端の技術が投入されたフラッグシップ・シンセとして、

MOTIFは楽器シーンを牽引し続ける。波形メモリーを贅沢に使用した高品位な音色と、

実用的かつ操作性に優れる機能は多くのミュージシャンたちに支持され、

MOTIFシリーズは、さまざまな制作／ライブの場で、その実力を発揮してきた。

そして2010年。ヤマハは、最新モデルMOTIF XFを発表。

なぜMOTIFはシーンの最前線を走り続け、多くのミュージシャンたちに愛用されてきたのか。

このフラッグシップ・シンセの進化の歴史を振り返ってみよう。

さらに2011年、MOTIFシリーズのDNAを受け継ぎ発売されたモバイル・シンセMOXシリーズの魅力にも迫る。

# MOTIF History 進化を続けるフラッグシップ・シンセの歴史

MOTIF Series



## ● MOTIF (2001年)

同時発音数: 62+プラグイン・ボード (3スロット)  
音色数: [ノーマルボイス] プリセット: 384、ユーザー: 128、GM: 128  
[ドラムキット] プリセット: 48、ユーザー: 16、GM: 1  
波形メモリー: 84MB相当 (16ビットリニア換算)



## ● MOTIF ES (2003年)

同時発音数: 128+プラグイン・ボード (3スロット)  
音色数: [ノーマルボイス] プリセット: 768、ユーザー: 256、GM: 128  
[ドラムキット] プリセット: 64、ユーザー: 32、GM: 1  
波形メモリー: 175MB相当 (16ビットリニア換算)

## ● MOTIF-RACK (2002年)

同時発音数: 128+プラグイン・ボード (2スロット)  
音色数: [ノーマルボイス] プリセット: 640、ユーザー: 256、GM: 128  
[ドラムキット] プリセット: 48、ユーザー: 32、GM: 1  
波形メモリー: 84MB (16ビットリニア換算)

## ● MOTIF-RACK ES (2004年)

同時発音数: 128+プラグイン・ボード (2スロット)  
音色数: [ノーマルボイス] プリセット: 768、ユーザー: 384、GM: 128  
[ドラムキット] プリセット: 64、ユーザー: 32、GM: 1  
波形メモリー: 175MB相当 (16ビットリニア換算)

2001

2002

2003

2004

2005

Other  
Related  
Models

## ● S90 (2002年)



## ● S90 ES (2005年)



## ● M06 / M08 (2005年)



TIMELINE

高品位なサウンドと豊富な機能という軸は変わらないものの、さまざまな面で進化を遂げてきたMOTIFシリーズ。  
ここではそれぞれのモデルの特徴を追い、その進化の歴史を見ていこう。

文:守尾 崇

MOTIF XFが発表され、さらなる進化を遂げようとしているヤマハMOTIFシリーズは、すでに10周年を迎えた。ここでは、これまでのMOTIFシリーズの歴史を各機種の特長を踏まながらその進化の歴史を紹介したいと思う。

### 音色と使いやすさを追求した シリーズ最初のシンセMOTIF

まずはその前に、MOTIFの歴史が始まったころのことを話そう。2001年当時は、ある意味ハードシンセの過渡期とも言えるだろう。ソフトシンセも登場してはいたが、コンピューターの処理速度も今より遅かったため、現在ほどの安定した感じではなかった。そんな中、各シンセ・メーカーはそれまで登場していた音源方式を組み合わせたりしつつ新しい機種を登場させていた。当時ヤマハからは“EXシリーズ”というシンセサイザーが登場していて、このシリーズは本体にAWM2、ANやVLといった物理モデル、モデリングをさらに進めたFDSP音源というさまざまな音源を詰め込んだシンセだった。

そしてMOTIFシリーズの最初を飾るシンセ、その名も“MOTIF”が2001年に登場する。EXシリーズのように複数音源を同時に詰め込むスタイルをやめ、音源方式は当時のハードシンセとしては大容量の84MB波形メモリーを搭載、AWM2+サンプリング機能に絞られた。またAWM2以外の音源方式を使用するために、Modular Synthesis Plug-in Systemという、プラグイン・ボードを装着することで本体の音源方式とは全く独立した音源を追加することのできるシステム(MOTIF

では3スロット装備)が採用されたことで、よりスピーディーに、さらにボードを拡張することで発音数自体が増えるという、使う人に合わせたパワーアップができるシンセとなった。ちなみにボードの種類としては、ANで使用されていたバーチャル・アナログ音源、物理モデルVA音源、DX7を進化させた6オペレーターのFM音源などが用意されていた。また、サンプリングした波形情報を音楽的にコントロールするために、Integrated Sampling Sequencerという、波形を独自のアルゴリズムにより自動的にスライスし、それをシーケンスで鳴らし再構築、オーディオでありながらテンポ変更などに演奏を追従させるという機能が内蔵された。これにより、例えばギターのカッティング・フレーズなどで、テンポを変えたりハネ具合を変えたりしながらそのまま演奏させるというようなことが可能になった。

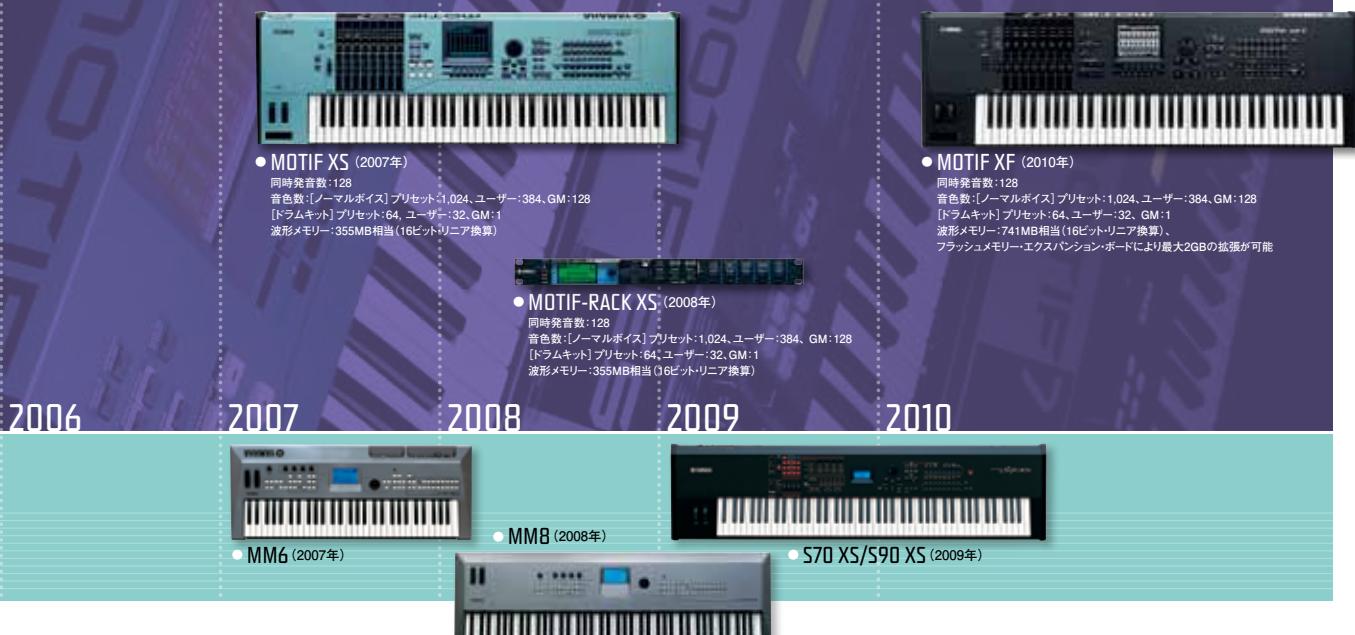
操作的な部分では、膨大な数になっていくシンセのプリセット音色を探しやすくするために、音色の種類(ピアノ、ギターなど)でサーチできるカテゴリー・サーチ機能を搭載。さらに、お気に入りを登録しておけるフェイバリット・カテゴリー機能も用意された(当時かなり使いやすくなってしまった記憶がある)。また、シングルやマルチなどの枠を越えてワンタッチで呼び出せるマスター・モード機能が用意され、ライブで活用できたり、本体左側にある4組のノブ、スライダーを使ってPC上のシーケンス・ソフトをスタート、ストップしたりボリューム、パンなどをコントロールすることができたり、音色だけでなく使いやすさという点もシリーズ・スタート時からかなり意識されていたと言えるだろう。さらに演奏の際に便

利な機能としては、パフォーマンスマードが搭載されていた。これは最大4つまでのボイスの組み合わせを記憶しておけるもので、レイヤー、スプリットというような設定からアルペジエーター、コントローラーなども含めた複雑な組み合わせも記憶しておけるようになり、リアルタイムでの表現力が広がった。そして61鍵モデル(MOTIF 6)、76鍵モデル(MOTIF 7)、88鍵モデル(MOTIF 8)が用意されており、以降シリーズを通じて3種類の鍵盤がラインナップされていく。

### 音楽的な表現力を高めるための 強化を図ったMOTIF ES

MOTIFの音源部分をラックに収めて登場したMOTIF-RACKは、2002年に発表される。当時ラック・タイプの音源は2Uのものが多かった中で1Uというコンパクトなスタイルで登場。小さくなつたことで操作にくくなってしまった部分がありつつも、発音数が62音から128音と約2倍にアップ、音色メモリー数もプリセット384から640、ユーザーも128から256と増加。またマルチで使用する際にありがたいインサーション・エフェクト4パート同時使用可能。さらにリバーブ・エフェクトもクリティカル・ハード的にアサイブル・アウトが2から4に増え、プラグイン・ボードも1Uサイズでありながら2枚使用可能だった。と、コンパクトでながらかなりのハイクオリティで、価格も安く設定されていたためプロからアマチュアまでかなり評判になった。

2003年に登場したMOTIF ESは、MOTIF-RACKで進化した発音数はそのまま、マルチでのイ



ンサーション・エフェクトは8パートに、波形メモリーも倍以上とサウンド・クオリティ的なパワーアップを遂げたのはもちろん、音楽的な表現力を高めるためアルペジエーターにそれまで定番だったパターンだけでなく、ドラム・ループやギターのカッティングなど1,787タイプが内蔵された。このアルペジエーターは、“キーボードメガボイス”というさまざまな奏法の音色をキー・ナンバーとペロシティ方向にもアサインした音色と組み合わせて使うことによって、それまでのアルペジエーターでは表現するのが難しかった生楽器の演奏ニュアンスなども、かなりの再現性でリアルタイム演奏させることができるようになった。また、そのころからアマチュアでもマスタリングという言葉を意識するようになったことも踏まえてか、マスター・エフェクトが内蔵されトータル・コンプ的なエフェクト処理も可能となり、制作から完成まで全行程の音楽制作を意識したシンセとなった。

MOTIF ESからMOTIF-RACK ES(2004年発売)への進化として、音楽制作という方向性を重視、マルチのプリセットが音楽ジャンルごとに用意された。また、スタンバーグ社とヤマハの共同開発プロジェクト“STUDIO CONNECTIONS”が提唱されたことで、PC上のシーケンサーでプロジェクト(曲)ファイルを開くだけでハードウェアの設定も完了するなど、さらに便利に進化した。

### 波形メモリーが倍増 複雑な音作りを可能にしたMOTIF XS

波形メモリーがさらに倍になり、2007年に登場したMOTIF XS。ここへきてプラグイン・ボードは

対応しなくなり、AWM2音源+サンプリング音源のみに。音作りの機能としては、1音色が8エレメントで構成されるようになり、これによりペロシティによるさらなる細かな音色変化や、複雑な組み合わせなどが可能になった。そしてパフォーマンス機能はさらに進化し、アルペジエーターを同時に4つ再生することができるようになり、4パートを使用した曲のアレンジ・データが内蔵されているようなスタイルになった。またエフェクトもパワーアップし、VCM (Virtual Circuitry Modeling)によるビンテージ・エフェクトを使ったような質感の再現や、ポコーダー機能も搭載されるなど、音作りの細かい詰めの部分もかなり充実した。また、カラー液晶ディスプレイが搭載され操作性も格段にアップした。

この時点での音色も機能もかなりの充実度となつたMOTIFシリーズ。2008年リリースのMOTIF-RACK XSでは、単なる音色が詰まった箱で終わらせない、操作したくなるラックを目指したようで、今までとは違う独自の操作性になっている。カテゴリー・サーチやノブによるリアルタイムでの音色エディットをしてみると分かるのだが、1Uという限られたパネルの中で非常に使いやすい操作性が実現されている。

### 受け継がれるMOTIFの系譜 そしてMOTIF XFの時代へ

MOTIFシリーズは、そこから派生した製品が多く発売されているのも特徴だ。その機能を継承した機種を一部紹介しておこう。

2005年に発売されたMO6/8はMOTIF ES

の音質や機能を受け継ぎながら、サンプリング機能を省き発音数などを抑えることで購入しやすくなったミドルレンジ・モデル。とはいって波形、音色数、アルペジエーター・フレーズなどの肝となる部分はほとんどMOTIF ESシリーズと同じというコスト・パフォーマンスの高いモデルである。

MMはMOTIFシリーズの波形を受け継いだエンタリー・モデル。61鍵のMM6は2007年、88鍵のMM8は2008年登場。初心者にも操作しやすいよう独自の操作性となっている。またMM6については軽いので(5.0kg!)ソフトケースなどで持ち運ぶ場合にも便利。さらにこの価格帯で88鍵盤も用意されているのはとてもうれしい。

2009年発売のS70/S90 XSはSシリーズの最新機種。MOTIF XSの基本機能はそのまま、新たにサンプリングされた142MBのピアノ音色を加え、さらにパフォーマンス・クリエイター機能によりレイヤーやスプリットなどの組み合わせを簡単に作ることができたり、演奏者が直感的に操作できるようパネル上のレイアウトが変更されてたりと、演奏のためにさまざまな機能が追加されている機種。光るボタンも増え、演奏中などでもかなり直感的に操作できる。

そして2010年9月、ボディ・カラーをブラックに変更、そのイメージを大きく変えたMOTIF XFが登場した。10年という月日の中で、いつもミュージシャンとともに歩み楽器シーンを牽引してきたMOTIFシリーズ。フラッグシップ・モデルと呼ばれるに相応しいこのシンセサイザーは、今後もさらなる進化を続けていくはずだ。



M O T I F G a l l e r y

写真でたどる歴代モデルの雄姿 ①

撮影:八島崇

# MOTIF



2001年登場の初代モデル。  
大容量の波形メモリーによる高品位なサウンド、  
直感的な作業を可能にする高性能シーケンサーを搭載するなど、  
歴史の幕開けに相応しいエポック・メイキングな1台。

# MOTIF ES



音楽的な表現力を高めた2代目モデル。2003年リリース。  
“キーボードメガボイス”を搭載することで、生楽器を演奏する際のニュアンスを再現した。  
アルペジエーター、エフェクトも強化された。

# MOTIF XS



波形メモリーが倍増し、カラー・ディスプレイが搭載された2007年発表の3代目モデル。  
1音色が8エレメントで構成、エフェクトもパワーアップするなど、  
複雑かつ多彩な音作りが可能になった。

# MOTIF Maker Interview

開発者の言葉で紐解くシリーズ誕生秘話

華々しい進化を遂げたシリーズの裏側では、多大なる努力が費やされている。

そこで一番近くで製品を見続けてきた開発者たちにインタビューを敢行。MOTIF誕生秘話を語っていただいた。



MOTIF

初代モデルの音色の開発は気合を入れてやり切りました

担当プロデューサー 武田文光／コンテンツ担当 大貝洋一郎

## ●MOTIFの開発コンセプトを教えてください。

コンテンポラリーな音楽を制作するためのプロフェッショナル向けワークステーションです。(武田)

## ●MOTIFの名前の由来は?

さまざまなフレーズ=MOTIF(モチーフ)を組み合わせて音楽制作を行うという、使い方の形態からきています。“この楽器を弾くことで、どんどん音楽のモチーフが生まれてきた”と言っていただけることを願って付けました。(武田)

## ●MOTIFのデザイン・コンセプトという?

先進的かつクールで、プロフェッショナルな堅さを兼ね備えたもの。使いたい機能にすばやく行き着けるダイレクト・スイッチ、ノブ、スライダーを分かりやすく配置することで、タッチパネル以上の操作性を実現しようと考えました。(武田)

## ●AWM2音源をサウンド・エンジンとして採用するに至った経緯は?

サウンド・エンジンは、先行モデルのS80で好評でしたので、それをベースに演奏だけでなく制作に使える音を補強するというごくごく自然な流れで開発されました。ノーマル音色、ドラム音色、サンプリングを、同じ音源チップ上で同居させる上で、整合性のとれたパラメーターを決定するに際しては、

議論を重ねましたね。(武田)

## ●特にこだわった音色はありましたか?

初代MOTIFということで、音色開発にも気合が入っており、ほぼ全面的に力を入れてやり切った感じです。どの音色にも、どの音色ジャンルにも愛着があります。あえて言えば、エレピ(ローズ系)と小規模ストリングス系とドラムです。アコビの音に力を入れていないということではなく、もともとヤマハに十分な力があったので、ほかの音色よりは時間がかかりませんでした。(大貝)

## ●アルペジエーターが充実しているのもMOTIFシリーズの特徴です。

CS1x、S80と歴代のシンセサイザーでアルペジエーターを発展させてきましたが、その中で“フレーズ制作のツール”“音色の紹介フレーズとしての働き”“音色の動きの一部”の3つの点で手応えのある結果が得られていました。それを、MOTIFでさらに充実させるようにしました。(大貝)

## ●内蔵音色以外のそのほかの音源を、プラグイン・ボードで拡張できるようにした理由は?

シンセサイザーではCS6X/S80から採用されていて、自然の流れだったと思いますが、アンサンブル演奏をするにも、制作をするにもAWM2音源だ

けでは表現できない音色素材はあるし、同じAWM2音源でも、本体のメモリーには限界があるので、もっと多彩で新しい音色素材を、というミュージシャンの欲求に答えるために、採用しました。(武田)

## ●Integrated Sampling Sequencer開発の経緯を教えてください。

MOTIFには素材としての、使える音、使えるフレーズがぎっしり詰まっていますが、そこからインスピアイアされたミュージシャンが新たなフレーズを素早く作り出し記録していくる音楽制作ツールとして、通常のフレーズ・シーケンサーや進化したアルペジエーターと、サンプリングとの組合せをシームレスに行えるように考えました。(武田)

## ●開発に際しての、そのほかのエピソードなどありましたら教えてください。

ユーザー・インターフェースの決定には、試作前の段階で、実物大のパネル・スイッチの絵をボール紙に貼り付けて、アメリカに行き、ミュージシャンをはじめとして関係者に印象を聞きました。音色についても先行モデルのS80をもとに制作過程でも使える音になっているかの実験を行なうなど、あくまでユーザーの評価を判断の基準として、製品を世に送り出すことを心がけました。(武田)

# MOTIF ES

フレーズ・ファクトリーの幅を広げることが目的でした

担当プロデューサー 井出健介／コンテンツ担当 坂本崇

## ●MOTIF ESの開発コンセプトを教えてください。

“フレーズ・ファクトリー”です。音のみならず、リアルでクールなフレーズを次々と生み出し、それをつなげて、音楽のスケッチができるようにする、というプロ向けのワークステーションです。(井出)

## ●音源の強化は、どのようなポイントを踏まえて行われたのですか?

シンセサイザーの開発期間中はもとより、製品がリリースされた後も、実際のライブ／制作現場での世界中のトップ・アーティストの意見・要望を取り入れ、波形や音色データをはじめ、サウンド・エンジンのブラッシュアップの努力は絶え間なく行っています。特に“鍵盤と音とのマッチング”にはとことんこだわり、“鍵盤を弾いていて、自分の意図どおりにコントロールできる”ような合わせ込みは入念に行って

います。(坂本)

## ●新規搭載の音色の中で、特に注力したことなどですか?

“キーボードメガボイス”を搭載したこと。ギター・ベースをはじめとしたMIDIの打ち込みが難しい楽器も簡単にリアルな音が出せ、もちろん手弾きでもホンモノの楽器に負けない演奏ができるように仕上げました。“MOTIF”的樂器名に相応しく、曲作りのモチーフをインスピアイア、アシストできるような便利な機能です。(坂本)

## ●前機種MOTIFやS90の波形、音色も取り込むことができるようになしたのはなぜでしょうか?

MOTIFのサウンドについては、やはり単純にMOTIFの後継モデルだったから、進化した快適な環境で使えるよう、既存のMOTIFユーザーに



も安心して使っていただきたかったからです。S90のサウンドについては、ライブ演奏で活躍しているSのサウンドを制作でも使えるようにという試みからです。冒頭に述べました“フレーズ・ファクトリー”的、可能性を広げる事が目的でした。(井出)

## ●2代目の開発で苦労した点を教えてください。

MOTIF ESは、デザイン、ユーザー・インターフェースはMOTIFとほぼ同じですが、中身は根本的に違います。それもあって、全く違うワークステーションにするという案もあり、後継か、新規かの岐路に立ちました。結果、MOTIFのコンセプトを育てていくという方向を取りました。それにより、MOTIFというブランド定着させるため、デザインとユーザー・インターフェースはあえて初代にそろえました。(井出)

# MOTIF XF

ブラック・カラーへと大きくイメージ・チェンジした、シリーズ最新モデル。  
大容量化がさらに加速、新規音色を多数内蔵する。  
加えてフラッシュメモリーによる音色の拡張も可能となっている。

YAMAHA



# MOTIF XS

ユーザーをインスピアイするシンセサイザーに仕上げました

担当プロデューサー 堀 晃／コンテンツ担当 伊藤義久・大高史嗣

●MOTIF XSの開発コンセプトを教えてください。

楽器としての性能を上げることはもちろんですが、MOTIF ESのコンセプトである、“フレーズ・ファクター”の考え方をさらに進めて、より直感的、感覚的に曲のイメージを形にできるように進化させました。例えば、パフォーマンス・モードでは、気に入った音色やアルペジオを最大4パート重ねて演奏することができ、その演奏をそのままシーケンサーに録音することができます。“音を出してたら曲の土台ができた”というようにユーザーをインスピアイするシンセサイザーに仕上げました。(堀)

●カラー液晶画面を導入した経緯は？

操作性の向上、情報一覧性をアップするのが目的でした。音作りや、パターン制作時など、そのときに一度に知りたいパラメーターの値を視認できることで、音楽の方により意識を使えるようにしたかったのです。また、リスト表示可能にすることで、エフェクトやフィルターの種類を変更するときに目的のものを迷いなく選ぶことができるなど、ユーザー目線をポイントにしています。(堀)

●音源はどのように強化されたのでしょうか？

CPUやDSPといったハードウェア部分とOSといったシステムの根幹の見直しを行いました。AWM2という音源方式そのものは同じですが、4パート同時に使用できるアルペジエーターやVCMエフェクトの搭載を実現しました。またボイスの強化

も単なる技術の進化に陥らず、8エレメントを全部使い切ろうとして発音の重い音にならないように気を付けました。あくまで楽器としての表現力を上げるために、という思考ですべてが考えられています。(堀)

●XA (eXpanded Articulation) 機能が導入され表現が広がりました。

ギター、管楽器、弦楽器の音色群の表現力がアップしました。通常の鍵盤演奏の奏法ではコントロールできない、元の楽器の持っている特性を表現できるようになりましたね。AF(アサイナブル・ファンクション)ボタンを使ったXAコントロールには特に注力しています。(大高)

●アルペジエーターを大幅に強化した理由は？

MOTIF ESまでのアルペジエーターは、1パートのみの再生に限られていたものの、音楽制作上の有力なツールとして活用されてきました。MOTIF XSでは、そのアルペジエーターを使った音楽制作手法を発展させ、よりバリエーション豊かに曲のイメージを膨らませたり、スピーディーにベーシック・トラックを作り上げができるよう、複数パートのアルペジエーターの同時再生を可能とするなどの機能強化をしました。(伊藤)

●さらにVCMエフェクトも導入されました。

世界中のレコーディング現場でスタンダードになっているヤマハのデジタル・ミキサーに2004年から搭載された“VCMエフェクト”的評価が非常に

高く、“これをシンセサイザーに搭載できないか？”という問い合わせが数多くありました。これを実現するためにもCPUパワーの増強やOSの一新を図りました。(堀)

●拡張ボード・スロットは廃止した理由は？

プラグイン・ボードはANやVL、DXといったシンセサイザーのエンジンそのものが追加できることが特長ですが、波形の大容量化や、XA機能による表現力強化を優先させました。また拡張音源は夢を広げる一方で、操作や設定の煩雑さが音楽を表現する意欲を削いでしまう面もありました。そこでMOTIF XSではシンセ本体1台で、楽器としてのあるべき形を追求したのです。また、DAWの普及に伴って、大容量のハードディスクを搭載したPCを巨大なデータ・ストレージとして使うことができるようETHERNETを搭載しました。ユーザー同士でのMOTIFの音色データのやり取りや、カード・パーティによる音色ライブラリーはPCを使ってダウンロードするので、そのデータをいちいちUSBメモリーなどにコピーせずに、直接読み込んだ方が自然だと考えました。(堀)

●そのほかにこだわった点を教えてください。

音を出しつぱなしにして、音作りやフレーズ、パターン作りができるようになりました。MOTIFと戯れることで音、音楽が変化変貌していくことを体感できるようにしたかったのです。(堀)



●MOTIF XFの開発コンセプトを教えてください。

基本は歴代MOTIFと同じ、ハイエンド・ワークステーション・シンセサイザーとして、音、デザイン、機能の新規性を提供することです。ポイントは3つあって、1つ目はサウンドです。新規サンプリングを含め内蔵波形を倍増させました。S6グランド・ピアノ、クラビネットなどのキーボード・サウンドほか、ドラム・キット、ベース、ギター、プラス、ストリングスなどのR&Bサウンドを強化し、さらに、骨太のシンセ・サウンドも追加しました。そして2つ目は波形拡張メモリーとして、業界初の最大2GB拡張可能な大容量フラッシュメモリー・エクスパンション・モジュールを採用したこと。ライブラリーやオリジナル・サンプルを、電源を切っても保持してくれます。そして3つ目はインターフェースです。精悍なブラック・ボディに、視野角が先代に比べ広がり、見やすくなった新規ディスプレイを採用しました。タップ・テンポはじめ新

しくパラメーターのツマミを追加、使い勝手を向上させました(大野)

●ボディ・カラーをブラックにした理由は？

MOTIFのユーザーは、非常に年齢の幅が広く、また皆さん長く愛用していただいてますので、デザイン・チームにはそんなユーザーのための道具となるようなデザインをお願いしました。車で例えるなら、エンジン性能と足回りの良さを誇り、マルチユースに耐えうるSUV系ですね。また多くのプロ・ミュージシャンに使っていただいていることから、議論を重ね、デザイン・コンセプトを“プロフェッショナル・ツール”とし、それに相応しいブラックを選択しました。コンセプトに沿うよう、グラフィックも極力シンプルにデザインされています。(大野)

●音源はMOTIF XSからどう進化しましたか？

音源システム自体はMOTIF XSのものを引き継いでいますが、音の出口のアナログ回路をさらにブ

# MOTIF XF

デザイン・コンセプトは“プロフェッショナル・ツール”

担当プロデューサー 大野 拓／コンテンツ担当 村田潤一郎

ラッシュアップすることで、音のスピード感、音圧が増し、より正確な音像が得られるようになっています。また、音色的には、キーボーディストにとって最も重要な手弾き系音色を強化しました。また、それ以外の音色についてもバリエーションの充実を図りました。(大野)

●新規搭載の音色の中で、特に注力したものは？

強いて1つだけ挙げるとすれば、クラビ音色です。バンド・アンサンブルで使いやすいサウンドに仕上げました。本物のクラビは押鍵のたびに音質や拳動が異なるという不安定な要素があり、そのような部分もリアルに再現しています。ほかにも、細かくサンプリングされたキーオフ音やモジュレーション・ホイールに仕込まれたミュートレバー効果など、とにかくリアルさにこだわりました。(村田)

●開発で特に苦労された点を教えてください。

音の最終段、出力部のアナログ回路を改良した点です。ハード担当者の努力の結晶です。(大野)

# MOTIF XF Review

## 最新機種のサウンド・実力を検証レビュー

文:近藤昭雄

ボディ・カラーがブラックに変更され、ガラリとその雰囲気を変えたシリーズ最新モデル、MOTIF XF。ここでは、前モデルから進化したポイントを中心に、その実力を検証していこう。

### Point 1 精悍なブラック・カラーでシャープな雰囲気に

ヤマハMOTIF ESからXSと本誌でレビューを書かせていただいた筆者も実は大のMOTIFファン。ライブ・セッティングもMOTIF XS8&XS6に初代MOTIF-RACKが2台を使用している。そんなMOTIFシリーズも世界中のアーティストやプレイヤーに愛され続け早10年。そのアニバーサリーな節目にリリースされた最新シリーズMOTIF XFをジックリと検証してみよう。

まずひと目で分かる違いがカラーリング。MOTIF XS(以下XS)のサイバーなブルーからMOTIF XF(以下XF)では精悍なブラックペスイッチ。シルク印刷された文字表記部分にも高級

感が漂う。さらに中央のLCDディスプレイもブルー系からホワイト&レッド系へ変更され全体的にシックかつシャープな雰囲気を醸し出している。

そのほか、XF6&7のFSX鍵盤やXF8のBH(バランスドハンマー)鍵盤、フロント&バック・パネルや入出力類、ノブ&スライダー、シーケンス&アルペジエーター、エフェクトなどの仕様はほぼXSと同等。XFを購入したXSユーザーは「何ら考えることなくすぐに使用できるのはうれしい点だ。これを別な視点で見れば“操作性向上の必要がない”ということ。“すでにMOTIFの操作性が完ぺきである!”というこの裏付けと言えるだろう。



▲トランスポーズ・ボタンなどを含め、すべてをブラックに変更したことごと、精悍な雰囲気に。それに合わせて、ディスプレイもシックかつシャープなものになっている。

### Point 2 波形メモリーの倍増による高品位なサウンド

MOTIF ESからXS、そして今回のXFへと毎回倍増してきた波形メモリー。XFではXSの倍である714MBもの波形メモリーを搭載。さらにパリエーション強化にもつながる新収録の追加波形も1,200種以上に。波形レベルのサウンド・エンティティの幅が格段に広がった。

XFの各プリセット群は基本的にXSのプリセットを継承しているのでXSからXFに買い替えしたとしても“あの音がない!”と慌てることもない。ただしXFでは出力のDAコンバーター部の改良もあってか、そのサウンド・クオリティはさらに向上している。レビュー用に借りたXF7と所有しているXS6の同じピアノ・サウンドを比較してみると、臨場感に差を感じた。高域の澄みわたったシルキーさ、中低域のガツンとしたおいしい質感がXFではよりリアル。これは高品位オーディオ・インターフェイスを使用した時の印象によく似ている。

新搭載されたプリセット・サウンドとしては“Natural Grand S6”が素晴らしい。これは同

社のハイグレード・グランド・ピアノS6をサンプリングしたピアノ音色。元波形の良さはもちろん、ペロシティ・スイッチの構築が見事で、特に弱いタッチでの存在感が秀逸だ。ぜひ88鍵タイプのXF8で弾いてみたい!と思わせる絶品アコピ・プリセットである。そのほかストリングス、プラス、シンセ、ティンパニ、シンセなど、XSとは別次元のパッチも収録されている。

ちなみにXSのボイス・ユーザー・メモリーは、単にプリセットからのピックアップでしかなかったが、XFではユーザー・バンク1にプリセットには入りきらなかった新規サウンドを収録。ドラムも同じく新規ドラム・キットを収録している。“XSのプリセットなら全部覚えてるぜ!”という方はまずはこのXFの“VOICE [USER 1]”を弾いてみるべし!

生々しくブラッシュアップ&大容量化されたXFサウンドなら当然プレイヤーの力量も存分に發揮させてほしい。そんなときはXSから新搭載のアーティキュレーション機能“XA機能”と併用すること

で、一層リアルで表情豊かなプレイが楽しめるこだろう。

あと忘れてはいけないのがXFのパフォーマンスにも128種類の最新サウンドがプリセットされること! XSとはひと味もフタ味も違ったグルーピーかつ壮大なループ&シーケンス、オーケストレーション、スプリット&レイヤー・サウンドが満載。曲作りのアイディアも沸きまくること請け合いだ。



▲新規搭載の“Natural Grand S6”。そのほか、クラビネットなどの鍵盤系、プラスやストリングスなど、キーボーディストにとってうれしい音色が多数追加された。

### Point 3 フラッシュメモリーで広がる可能性

XFでは新たに最大2GBのフラッシュメモリー(別売)を搭載でき、本体内蔵波形メモリー、128MBのSDRAMと合わせて最大で約3GBの波形メモリーを持つモンスター・シンセとして使用可能。フラッシュメモリーは一度データをロードすれば電源を切ってもメモリーが保持されるため、追加した波形を含む音色はプリセットと同じように扱えるのだ。さらに今後、ヤマハから無償配布される予定の音色データ、オンラインで販売予定の大容量サンプルの音色データから自分の好きな音色を選んで追加することができ、自分だけの

シンセサイザーを作り上げることができる。また、よく使うドラム音色をオリジナル・キットとしてフラッシュメモリーに保存しておけば、電源を入れればすぐにプリプロ可能というハードウェアならではの利点を最大限に活用することができる。

わずか数小節の“モチーフ”から人を感動させる音楽へ。今振り返ればたった84MBの波形メモリーからスタートしたMOTIFシリーズだが、それから10年。創造力への“至高のショートカット”ができるシンセMOTIF XFとして生まれ変わった本機を、ぜひさまざまな現場で活用してみたいものだ。



▲MOTIF XFでは、フラッシュメモリーを2枚搭載可能。2GBの音色を追加でき、Web(<http://jp.yamaha.com/mp/>)からMOTIF XF専用コンテンツをダウンロードできる。

# MOTIF Artist Comment

## アーティストが語る「MOTIF」という楽器

最後は、MOTIFを愛用しているミュージシャンたちの言葉で本特集を紹介しよう。

実際に使いこなしている彼らだからこそ分かる  
この楽器の魅力を存分に公開してもらった。



向谷実

**Profile** ● 日本を代表するフュージョン・バンド、カシオペアのキーボーディスト。現在までに40枚以上のCDを発表。また、鉄道シミュレーション・ゲームの開発も多数手がける。最近ではUSTREAMなどを駆使し、活動の幅を広げている。

**A1** MOTIF、MOTIF-RACK、MOTIF ES、MOTIF-RACK ES、MOTIF XSを使ってきました。きっかけは初代MOTIFが発売される同じ時期に、個人機材のコンパクト化を考えていました。MOTIF、MOTIF-RACKがラインナップにそろったのをきっかけに、今まで使用していたすべての機材を排除して、MOTIFを9台使用する音色作りを始めました。

**A2** 搭載されている音色で一番愛用しているのは“E. Piano”。ただこの音色はプリセットにはないもので独自のエディットによる音色となってます。参考になっている音色は、当時使っていたヤマハEX5のエレビを参考にエディットしています。

**A3** どの音色を選んでも問題なく使えるところです。あまり悩むことなく音色が決められるので作業時間が短く済みます。またパフォーマンスで使っていてもエディットしたい音をすぐエディットできて、さらにユーザー・エリアにストアすることなく、ソングで管理できることが非常に助かってます。

**A4** 音色自体もそうですが、やはり操作性ですね。初代MOTIFから基本操作が変わってない面もユーザーには助かります。後継機のXFも楽しめですね。

**A5** 今後はサンプリング機能を活用したセッティングをしてみたいですね。現在もサンプリング機能は使っているのですが、電源を落とすたびにデータをロードし直さなければならないのですが、XFではフラッシュメモリーが搭載できるとのことで、今後の音色作りが便利になり、さらに新しい音色を創造できるのではないかと思っています。



KO-ICHIRO  
Skoop On Somebody

**Profile** ● 1997年Skoop On Somebodyのキーボーディストとしてメジャー・デビュー。2008年通算10枚目のオリジナル・アルバムを発売。2009年ドラムのKO-HEYの活動休止後、ボーカルのTAKEとともに再始動、リリースやライブを精力的に行う。

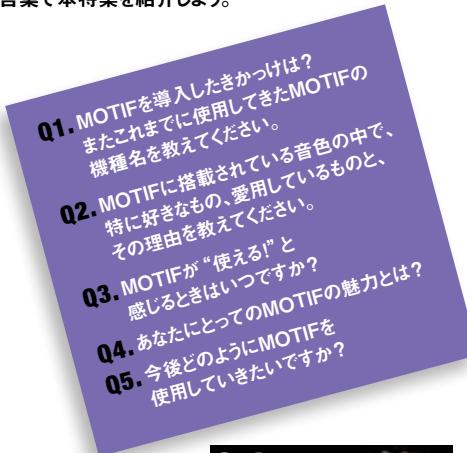
**A1** 導入したのはヤマハ・シンセを愛用してきて音が良かったので。MOTIF-RACKとMOTIF ESを所有。

**A2** エレビ系全般を愛用します。それにフェイザーのかかり具合や、トレモロの深さなどをエディット。

**A3** ライブ・パフォーマンスにおいてマスター・モードで音色を自在に並び替えられる。

**A4** 使い込めば使い込むほど奥深いところ。

**A5** 1台でどこまでできるかもっと極めてみたい。



Shinnosuke  
SOUL'd OUT

**Profile** ● ラップ・ミュージック・グループSOUL'd OUTのトラック・メイカーとして2003年デビュー。アーティストへの楽曲提供、サウンド・プロデュースなども行う。2010年ソロ・ユニット's capadeとして作品を発表、新境地を開拓した。

**A1** MOTIF ES 7、8→MOTIF XS 7と使用しています。SOUL'd OUTの音源制作及びライブ時においてマスター・キーボードとなるものを探していたのでデビュー当時から使わせていただいている。

**A2** ピアノ系は制作のスケッチから最終段階まで必ず使っているベタ惚れ音色。現代っぽいアレンジでよく使うのはテクノ／トランジ系のシンセ。両者ともソフトシンセにはない質感が非常に重宝してます。以下気に入っている音色です。

ピアノ系:Full Concert Grand, Vintage '74

シンセ系:Soft RnB, Poly Hook, HPF Dance, Power Dance Chords, Dirty Chords, Bright Dance

その他:Ethnic Dream, Beauty Harp

単体でのエディットはほとんどしませんね。そのまま使った方が使う意味があると思います……というかそのままで即戦力ですから！ ただし曲によってディレイやヘンド幅、アタック／リリースの値を合わせたいなどといった具合での微調整はあります。また、エレビやテクノ系のシンセをレイヤーさせて使うことが多いです。重ねてさらに好みの音色を作る感じ。制作面では最終的にミックスでいろいろなエフェクト加工を施せるのでほとんどエディットせず、どちらかというとライブ用の音色作りのときに先述のような処理を施しています。

**A3** Everytime !!

**A4** 学生のころはSY77、99があこがれの機材だったので、今のボクにとってはMOTIFがそういう対象。最新のモデルはブラックでしネ！ それと忘れちゃいけないのは、肝心の音色が“好み”ということ。他社が出してるシンセもそれ個性的な音色が持ち味ですが、昔からヤマハが持つ独特の質感・キャラ具合などに慣れ親しんでいるので。アコピ音色は立ち上がりも早く、シンセばかりのアレンジの中でも抜けがなくて埋もれずバキッとした感じ。決して生々しく浮いてない。リアルなんだけりアルじゃない。バランスがすごく良いので、制作作業においてミックスしやすいベクトルを持つ楽器だと思います。

**A5** 当然今までと変わらずに制作、ライブでもガンガン使っていきますよ！

**Profile** ● Janne Da Arcのキーボーディストとして1999年にデビュー。これまでに6枚のオリジナルを発表している。2008年には1stソロ・アルバム『ARTISAN OF PLEASURE』をリリース。また楽曲提供、アレンジ、プロデュースなど、幅広く活動中。



kiyo  
Janne Da Arc

撮影…八島崇

**A1** MOTIF、MOTIF ES、MOTIF XS (MM6も含む)です。

**A2** シンセ・リード系を歪ませて使うことが多いです。“Needle Bass”はベースとしてだけではなく高い音域でも無機質なリードとしてもよく使ってます。減衰系のパッドの頭にシンバルやヘル系を足して、サビ頭などに使うことも多いです。すごく華やかになります。

**A3** ライブで演奏中のとっさの“とりあえず”エディットでもちゃんと応えてくれるので助かります。ほかのハード／ソフト音源の足りない部分を補うこともできるので頼りになります。ハードなギターにも負けないので、家でもライブでも常にメインで使ってます。

**A4** 簡単に言うと、音色に飽きがこないです。いつでもいつまでも使えるスタンダードを揃しながらも、攻めの音色にあふれているところが好きです。最新のチャートの曲にも多く使われているはずなので、それが証拠だと思います。

**A5** MOTIF、MOTIF ES、MOTIF XSそれぞれのモデルにしかない好きな音色もあるので、新しいものが出来たからといって古いものは決してしまい込まずに、新旧混ぜ合わせて使って行きたいと思っています。それらをライブでずらりと並べてみたいです。でもやはり、今はMOTIF XFを並べたいかも……。



鈴木大輔  
GIRL NEXT DOOR 輸

**Profile** ● 2002年day after tomorrowのキーボーディストとしてデビュー。2005年の活動休止後は、プロデュース業もスタート。2008年にはGIRL NEXT DOORとしてデビュー、作品のリリース、ライブとも積極的に展開している。

**A1** やはりソフトシンセには出せない音の良さと太さです！ MOTIFからES、XSと全部使ってます(笑)。

**A2** ピアノです！ 曲に合わせて違うのでなかなか1つに絞れませんが、本当にいい音だと思います！ レコーディングではステレオ感の強いXSで、ライブなどは抜けの良いESが良いかな？

**A3** とりあえず自分の頭のイメージに近い音が入ってる！ まさにMOTIF！

**A4** ライブで複数の鍵盤や音源をコントロールするにも、とても優れてます！

**A5** ずっとマスター鍵盤(笑)。



アーティストが語る「MOTIF」という楽器  
MOTIF Artist Comment

福田裕彦

**Profile** ● 1980年、ベーストーン楽器としてのバンドQUYZのキーボーディストとしてデビュー。スタジオ・プレイヤーとして数多くのレコーディングに参加後、作編曲家としての活動もスタート。ゲーム、アニメ、映画音楽も多数制作する。

**A1** デモを依頼されたのがきっかけだったかな。以後、MOTIFはラックを除き(MOTIFにかわらず、個人的に“ラックのシンセ”はあまり好きじゃないので)全機種使っています。

**A2** 初代MOTIFからずっと入っている“Voodooman”というエグいギター・ソロ音色、XSのクラシック・ギター系が特に好き。音色の根幹にかかるようなエディットはしていない。

**A3** ソング・モードで16トラックをがんがん鳴らしているとき。

**A4** “楽器”としての完成度が極めて高く、かつ、“マルチ音源”としてもすぐ便利なところ。コンシュマー型シンセの黎明期から30年間くらいいろいろなシンセを使い続けてきた人間(要するにシンセ年寄り)からすると、MOTIFシリーズのプロダクトとしての充実ぶりは“単に驚異的”と評価したい。

**A5** 碎いて食ったり、上に乗って泳いだりはしない。ライブ、スタジオ・ワーク、そのほか音楽活動の全局面で使いたい。



**Profile** ● 高校卒業後渡米、ジャズ・ピアニストとして活躍。帰国後は自らのグループで活動を開始し、作品を発表する。また平井堅などのボップスのプロデューサー、映画音楽監督としても活躍。最近は新ユニットTOKYO FREEDOM SOULで活動中。

**A1** 発売前からすごいワークステーション・シンセが出るところヤマハから聞いていたので。初代MOTIF～ES～XS使用。

**A2** “Vintage '74”などエレビ系をローズ代わりに。クセがなく、強弱の表現にもよく反応してくれるので。エレビ系はプリセットのままですが、“Soft R&B”はボルタメントを増やして、SFKUaNK!!の作品などで活用しています。

**A3** MOTIFを弾いているときすべて。ライブのときもレコード制作時でも使いやすく、いつでも重宝しています。ほぼ仕事ごとに使っており、使った現場は数え切れないです。

**A4** とりあえず“ない音”がない。鍵盤系からドラム系まですべてにおいて汎用性のある音色～ジャンルに特化した音色を網羅しているので、音楽のアイディアが形になりやすい。また完成しやすい。

**A5** これまでどおり、あるいはこれ以上に使い倒します!

- Q1. MOTIFを導入したきっかけは? またこれまでに使用してきたMOTIFの機種名を教えてください。
- Q2. MOTIFに搭載されている音色の中で、特に好きなものの、愛用しているもの、その理由を教えてください。
- Q3. MOTIFが“使える!”と感じるときはいつですか?
- Q4. あなたにとってのMOTIFの魅力とは?
- Q5. 今後どのようにMOTIFを使用ていきたいですか?



**Profile** ● シンガー・ソングライター。22歳でLAに渡り、独学でピアノを始める。帰国後数々のミュージシャンとセッションを行ったのち、ソロ活動を開始。2009年にメジャー・デビュー、2010年6月に1stアルバム『Yes!!』をリリースした。

**A1** 種類の豊富さ、ソリッドなピアノ音色に惹かれて導入。MOTIF ESとXSを使用。

**A2** After 1984, Sweet Flute AF1、ストリングス全般。

**A3** 音の抜け、太さ、レンジの広さを感じるとき。

**A4** 生音はない倍音。

**A5** 生音ないサウンドを出す。



撮影:鈴木千佳

**Profile** ● 1989年にSOFT BALLETでデビュー。95年解散後、布袋寅泰のツアーサポートやプロデューサー、ソロ活動を行う。2002年SOFT BALLETを再始動。近年はジントルマン テイク ボラロイドを結成、リリースやライブ活動を展開。

**A1** ヤマハからモニターとして使わせてもらったのがきっかけです。MOTIF ES6、XS6を使用(S90も使用)。

**A2** XSのピアノ／パッド／ストリングスの音源はライブ時にかなり使用しています。またアルペジオ処理されたパフォーマンス音色もサウンド作りの基盤になることが多く、シンセサイザーのみならずドラム・マシン、アルペジエーター・シンセとしても重宝しています。ギター系のサウンドに自分流のストローク的なアルペジオを組んでアレンジ時に使用したり、アナログ・シンセ的なサウンドを自分流にアルペジオを組み直しフィルターで味付けしながらレコーディングしていくなど。とにかく、シンセの音色とギター系、ピアノ、ストリングスは“さすがヤマハ”という感じでいいですね。

**A3** ライブ時にベーシックなピアノ、パッド、ストリングス、リードなどすぐに使用できること。アレンジでのアイディアに行き詰ったときにパフォーマンス音色などからインスピレーションをもらえること。

**A4** オールインワン・シンセのようでいて、実は1つ1つかなり緻密に作られた、ヤマハの良い部分がとても出ているシンセだと思います。単純に音が好きです。

**A5** ライブでもスタジオでもメイン・シンセとして使っていくと思います。



**Profile** ● 1989年ボストンのバークリー音楽大学へ入学。帰国後は音楽活動を開始、上京後関口和之のソロ作にアレンジャーとして参加。その後、ケツメイシ、エヴァンガルマジンはじめ多くのアーティストの楽曲提供、プロデュースを行う。

**YANAGIMAN**

**A1** MOTIF-RACK、MOTIF-RACK ESを使用してきました。

**A2** Vintage'74、Sweetness、SparkleTin、WurliTrem、WurlAmped:まずはエレビ群。どの音も大好きです。存在感もあってすごくきれいで。まずここから試してみます。

60sclean1、60sclean2、Rotator、TouchWah、Mega Clean、Small Amp、Metal Mute、OverTheTop:ギター類もすごいです。かなり使えます。パッキングとかだと生楽器と勘違いして気が付かないかもしれません。

**A3** 音色がしっかりしていてほかに埋もれない骨太さ。そして何より音色がきれいなこと。

**A4** BoAの「DO THE MOTION」のプラスはMOTIFのプラスの音を使っています。生プラスのシミュレーションを入れてありましたが、これはこれでかっこいいと思い、結局そのまま使ってしまいました。やっぱり何よりもかっこいい音かどうかが問題。そんな音がたくさん入っているのが魅力です。

**A5** アルペジエーター機能もなかなかすごいです。本当に使える、かなり使えるアルペジオ・パターンが入っているので、それをちゃんと使ってみたい。



**Profile** ● 18歳でプロのキーボーディストとしてスタジオ・ワークを開始。1992年インスト・バンドDIMENSIONを結成、これまでに22枚のアルバムを発表。2005年プロ活動20周年を迎えた。現在ライブやプロデュース・ワークなどを精力的に展開。

**A1** マスター・キーボード1台すべてをコントロールできると言われて嬉しいですが、そうはうまくいかないのが実情です。しかしMOTIFが出たときは本当にそういう時代が来る!と直感してすぐ使い始めました。MOTIF8に始まり、ES8、ES7、XS8、XS7、すべて使っています。

**A2** ベーシックな鍵盤音色はすべて好きなのですが、アルペジオを駆使したシンセ音も好きでよく使っています。自分のよく演奏する音楽はどちらかというとアコースティックな質感のものが多いわけですが、そんな音楽にもフィットする数少ないシンセの1つだと思っています。ベーシックなピアノ＆エレビ系は常に数種類パフォーマンスで用意してあって、すべてパッドがレイヤーされています。これを状況によってコントロールすることで、ほぼ全部のセッションの状況に1台で対応できます。

**A3** どんなジャンルにもマッチする音色＆表現力はもちろんのですが、何かひらめいたときすぐそのアイディアに向かっていける操作性の良さも“使える!”と感じる要因です。

**A4** 音色の表現力と、1台で何でもできる利便性が極めて高いレベルで実現されているところです。アイディアを形にするのにストレスなく楽器に向かい合うことができます。

**A5** 今でもそななのですが、MOTIFは用途を限定せずすべての音楽に使いたいと思っています。そんな中からまた新しいアイディア、新しい使い方が出てくるのだと思います。



河野伸

**Profile** 高校時代よりバンド活動を開始。1994年SPANK HAPPYを結成。脱退後は中島美嘉、Crystal Kayをはじめ、アーティストのアレンジやプロデュースのほか、楽曲提供、ライブ・サポートを行なう。映画やドラマのサントラも多数手がける。

**A1** 長い間、他社製のマルチティンバー・シンセを使ってきてちょっとほかに目を向けようと思っていたところ、たまたまライブでMOTIFを弾く機会があり、良い音だと思っていました。そのすぐ後に1UのMOTIF-RACKが発売になったので、早速購入しました。家ではこのMOTIF-RACK、ライブでは鍵盤付きのMOTIFを使っています。

**A2** アレンジを始めるときのピアノの音は最初に出てくる“PowerGrand”というのが定番です。それからやや歪みのエレキはシミュレーションに重宝しています。ライブではプリセットの名前は分からぬのですが、シンセ・リード系、プラス系をよく使っています。エディットするのはディレイやリバーブ、EQなどのエフェクトとフィルター、あとは鍵盤上の弾きやすい位置に持ってきてオクターブはよく変えます。

**A3** ライブのリハーサルで感じます。ピアノにS90を使用していますが、操作が全く一緒なので楽だし、プリセットが探しやすいので目標に近い音色がすぐに見つかります。あとUSB経由で譜面灯の電源がとれたのは“使える!”と思いました(笑)。

**A4** あれば安心の1台です。

**A5** これまでと変わらずにライブのメイン・シンセとして、アレンジ作業では最初に鳴らす基本の音源として使っていきます。



Shingo Suzuki

**Profile** ベーシスト、キーボーディスト、トランク・メーカー。2008年リリースの1stアルバム「The ABSTRACT TRUTH」が、国内外で話題になる。Ovalのリーダーとして活動するほか、アートと音楽を融合させたソングブックを毎月リリース。

**A1** 1stソロ・アルバム制作時(2007~2008年ごろ)導入しました。オールインワン・タイプのシンセが欲しかったのですが、多くの機種を試奏した結果、音色や操作性など、とても使いやすくMOTIF導入のきっかけとなりました。自宅スタジオではMOTIF XS7を使っています。

**A2** 全体に生音系の音源は程良く使いやすいサウンドで、多くの音を使うトラックは、マイクで録音した音よりもオケになじむ場合が多いです。音源は基本的にプリセットのまま使いますが、シンセ・リード、ベースなどでフィルター、レゾナンスのツマミを多用してリアルタイムにその場で音色を作っています。以下、MOTIFの音源でよく使う音色の一部です。

**Full Concert Grand**:ピアノ音源としてとても使いやすく、EQなど加工しやすく重宝しています。生音レコーディングでうまくオケにはまらないときにはこのピアノ。／1968:古めのピアノが欲しいときのベーシックになります。独特的の音色で、上記音色とともに多用しています。／R&B Soft:広がりと厚みのあるモダンなR&Bローズ・サウンド。Ovalのアルバムでもよく使っています。／Early 70's:生ローズを録音してうまくハマらないときには、こちら。この音色を元に、加工して行きます。MOTIFのピアノ系音源は芯があるので、加工しやすい。／16+8+5&1/3:この音源はドローバーで表情が変わり、温く、厚みがある。デモを作るときに、よく気持ち良過ぎて気が付けばアドリブしまくってます。夜中に1人でヘッドフォンしながら聞いて変顔になるくらい。ははは。／On Road AS1:MOTIFのオルガン音色の中で一番好きです。歪ませると最高にホットなサウンドに。R&Bのバラードなどに良く使っています。Lush:ストリングスでよく使う音源。重たくなく、明るめに聴こえます。Ovalのアルバムでも多用。／Analog Strings:こちらもよく使うストリングス。サンプリングのティストを付け加えたり。ライブでももちろん使える音源。

**A3** インスピレーションが沸いた瞬間、すぐに使える音源がスタンバイしているところです。頭に浮かんだモチーフをすぐに演奏できるとき。演奏したサウンドが、“これだ”と思えて、そのまま音源に使用するとき。

**A4** 充実し、使える音色が豊富にある点が最大の魅力です。あとはPCにはない操作性。電源を入れてからすぐに演奏することができるし、豊富なパラメーターをツマミでリアルタイムに操作できる点も魅力です。また、吸い付くように滑らかな鍵盤のタッチ。これはシンセ・リードやローズ系の音色まで非常に演奏しやすいです。安定した動作も魅力です。PCの音源のように固まったりといった不安がないところも安心して制作に没頭できる利点だと思います。

**A5** フィルターなどのパラメーターを使いこなしてゆけば、無限に新しい音色を作り出すことができるし、あまり使っていないプリセットの音色を使って新たな音楽を創っていくたいですね。

◎ヤマハ お客様コミュニケーションセンター

シンセサイザー・デジタル楽器ご相談窓口

ナビダイヤル:0570-015-808

(携帯電話、IP電話からおかけになる場合は、053-460-1666)

<http://jp.yamaha.com/mp/>

## 海外アーティストも MOTIFシリーズを愛用!

もちろん海外においてもMOTIFはさまざまな現場で使用されている。ここではそのユーザーの一部を紹介しよう。

©William Haines  
デヴィッド・ブライアン(ボンジョヴィ)

マイケル・マクドナルド



スティーヴィー・ワンダー



オンリー・ギル(アリシア・キーズ/サポート)



オマー・エドワーズ(Jay-Z/サポート)



Purple Days

**Profile** 2007年にPurple Daysとして活動を始めます。その才能を小室哲哉に見い出され、結成半年後にTM NETWORKのコンサートに出演。2009年avex/tearbridgeと契約、2010年デビューを果たす。3月には1stアルバムをリリース。

**A1** 僕のファースト・シンセは、EOS-B500です。以後B700、B900と愛用、必然的にMOTIFシリーズも使わせていただけています。MOTIF ES、MOTIF XSと使ってます!

**A2** 個人的に、コンプ系が好みで気に入っています。

基本、シンセ・パッド系にはダブルでピッテージ・コンプをかけて使用しています。プリセットでは、クラビ音色のDX Pluck EPがたまりません!!

**A3** レコードティング、ライブなどで、愛用させていただけてます!! MOTIFの良いところは、どんなオケにもなんじんでくれるところです。“どのシンセ使おう……”なんてとき、結局MOTIFということがあります。

**A4** まず、プリセットがそのまま使える! そして、前にも出したように音なじみが良い! どんな場面でも対応してくれます。

**A5** プリセットが良いあまり、プリセットに頼りすぎなところがあり……自分なりのエディットの仕方を見つけ、MOTIFの無限の可能性を引き出していきたいです。MOTIFに自分を引き出してもらう……という感じですかね(笑)。

# YAMAHA

# MOX

■ヤマハ お客様コミュニケーションセンター シンセサイザー・デジタル楽器ご相談窓口  
ナビダイヤル ☎0570-015-808 (携帯電話、IP電話からおかけになる場合は、☎053-460-1666)

価格 ● MOX6 : 61鍵セミウェイテッド鍵盤モデル / MOX8 : 88鍵GHS鍵盤モデルともにオープン・プライス

文:守尾崇 / 撮影:星野俊

**MOTIF直系のサウンドを受け継ぎ  
軽量化、低価格化の上、充実の機能を搭載した  
ユーザー・フレンドリーなシンセサイザー**

Review



## Specifications

●鍵盤:MOX6=61鍵セミウェイテッド鍵盤、MOX8=88鍵GHS鍵盤 ●音源方式:AWM2+アーティキュレーション機能 ●最大同時発音数:64音 ●マルチティンバー数:内蔵音源16パート+A/Dインプットパート ●波形メモリー:355MB相当(16ビットリニア換算)、2,670ウェーブフォーム ●ボイス数:プリセット=1,024ノーマルボイス、GM=128ノーマルボイス、ユーザー=128×3、ノーマルボイス●バフォーマンス数:ユーザー=256音色(最大4パート) ●フィルター:18タイプ ●ドラムキット数:プリセット=64ドラムキット、GM=1ドラムキット、ユーザー=32ドラムキット ●エフェクター:リバーブ×9タイプ、コーラス×22タイプ、インサーション(A、B)×54タイプ×3系統、ボコーダー×1、マスターエフェクト×9タイプ、マスターEQ(5バンド)、バートEQ(3バンド、ステレオ) ●シーケンサー容量:約226,000音 ●音符分解能:四分音符/480 ●最大同時録再音数:124音 ●アルペジエーター:プリセット=6,720タイプ、ユーザー=256 ●外形寸法:61鍵=1,030(W)×358(D)×125(H)、88鍵=1,320(W)×405(D)×168(H)mm ●質量:MOX6=7kg、MOX8=14.8kg

## Rear Panel



▲リア・パネルの端子類は左から、USB(TO DEVICE、TO HOST)、MIDI(THRU、OUT、IN)、フット・スイッチ(アサイナブル、サステイン、フット・コントローラー)、アウトプット(R、L/MONO)、ヘッドフォン、A/Dインプット(R、L)を備える。



## Hands-ON

①8つのノブを搭載し、演奏中のボイスの音色やエフェクトに関する設定など、さまざまなパラメーターを調節可能。左側のファンクション・ボタンで割り当てる機能を選択する。②インサーション、システム、マスターの各エフェクトを選択するボタン。③カテゴリーサーチ・ボタン。選択中のパートに割り当てるボイスのカテゴリーサーチ画面が表示され、素早く音色選択が可能。④パフォーマンスクリエーター・ボタン。レイヤー、スプリット、ドラム・アサインのボタンを備え、選択しているボイスを元にパフォーマンスを作成することができる。⑤ファンクション、サブ・ファンクション・ボタン。各モードの中にある機能を選ぶボタン。⑥グループ・ボタン。ボイス/パフォーマンスのグループを切り替え時に使用。カテゴリーサーチ機能使用時には、カテゴリーサーチボタンとして機能する。

355MBの大容量波形による1,217音色

音色を即座に選べるカテゴリーサーチ

VCMエフェクトを内蔵

今回ヤマハから登場したシンセMOXは、その名にMOと入っていることから想像できるように、同社の歴史あるMOTIFシリーズの流れをくんだ、初心者からプロまで幅広く使える、かなりコストパフォーマンスの高いシンセとなっている。さっそくその実力を紹介していく。

### パフォーマンスクリエーターで 感覚的に音作りが可能

MOXは鍵盤数の違う2種類のラインナップがあり、61鍵盤（セミウェイティッド鍵盤）のMOX6と、88鍵盤（GHS鍵盤）のMOX8だ。今回この記事を書くに当たってMOX8が送ってきたんだが、箱から出してピックリしたのが……その軽さ！スペックを見たらなんと14.8kg! 1人でセッティングするのに全く問題ない重さだ（もちろん個人差はあると思うが……）。ちなみにこのGHS鍵盤、アコースティック・ピアノのように低音域はタッチが重く、高音域は軽くなっていて、88鍵での価格でこのタッチは素晴らしい。ちなみにMOX6も7.0kgと従来（MOTIFシリーズ）から約30%も軽量化されているので、ライブなどで持ち運ぶことの多い人にはうれしいだろう。

さて、さっそく取説を開いてみると、最初に開発チームからのメッセージとして“MOXはプロ・クオリティの音や機能をすべてのプレイヤーの方々が使いやすくなることを目指して開発されたモデルです”とある。こういう作り手が見える感じって“この野菜は私が作りました”みたいな安心感があつていね（笑）。

音源はAWM2音源で、波形メモリーはなんと355MB（16bitリニア換算）で、2,670波形という大容量！ この容量、最新のMOTIF XFよりは少ないものの、MOTIF XSと同じという大奮発。この大量の波形を使用して1,217ボイスがプリセットされている。もちろん、大量の音色から欲しい音を探すためのカテゴリーサーチ機能も内蔵しており、最近のMOTIFシリーズより画面は

小さいものの、イラストが表示され分かりやすくなっている。お気に入りの音色を集めることでできるフェイバリット機能のマークが“♡”るのが個人的にツボ（笑）。

そうして見つけたお気に入りの音色をエディットしたい場合、基本的な音作りに関しては8つのノブを使ってできるので感覚的に操作できる。さらに初心者に優しいのが“パフォーマンスクリエーター機能”。これは例えばエレピの音を弾きながら“この音にストリングスを重ねたいな”と思ったら[LAYER]ボタンを押すだけで自動的に音色が重なり、カテゴリーサーチ画面になるので、そこで重ねたい音色を選び必要に応じて微調整してストアすれば簡単にオリジナル・パフォーマンスの完成！というすぐれもの。ほかにも、演奏していく使用することの多いオクターブ・シフト、トランスポーズ、アサイナブル・キーなどが、左手側の操作しやすい所に配置されているのはうれしい。またかなり細かいことだが[UTILITY]ボタンを押しながら[INC]/[DEC]ボタンを押すことで、演奏中でも簡単に画面のコントラストを変更できるのも、ライブの際に照明などで画面が温まって見えにくくなったりときにはかなり便利だろう。と、使いやすさに関してのいろいろな違いがとても良い。

また、生楽器系のプリセット音色を弾いていると、とても自然に弾ける音が多いことに気付くが、これはMOTIF XSから継承された、XA機能（エクスパンデッド アーティキュレーション）が生きていて、例えばプラスの音色で、レガートで弾いた際にはアタック部分のないエレメントが再生されることで、自然なレガート演奏ができたり、弾くたびに発音するエレメントを切り替えることで、同じ音を連打しても違う波形が鳴り、より自然な演奏ができるようになっている。XA機能は生楽器系以外にも、弾くたびに全く違う音が鳴るようなトリッキーな音色にも効果的に利用されている。

さらにエフェクト機能も充実。ハイクオリティなリバーブREV-Xや、ビンテージ・エフェクトを回路レベルでシミュレートしたVCMエフェクトも内蔵されているので、空間的な広がりから過激な音までプロ・レベルの完成度で音を完成させることができる。またマイクを接続してボコーダーとして使うこともでき、口ボ声具合も良く（笑）オススメだ！

### USBケーブル接続で確立する オーディオ・インターフェース機能

MOTIFという名前の由来でもある、あるモチーフから曲として仕上げていくための操作性の良さももちろん受け継がれている。例えばパフォーマンス・モードで弾きながらイメージが浮かんだら、そのままRECを押しメトロノームに合わせて演奏するだけでソングやパターンに記録できるので、そこから必要に応じて修正していくけばぱッと浮かんだイメージを損なうことなく曲を作っていくことができる。もちろん鍵盤を弾けない人や、手で弾けないようなフレーズのためのステップ・レコーディングも用意されている。ソング、パターンのメモリーはフラッシュROMなので、ストアさえ忘れずにしておけば電源を切っても消えないところも便利だ。

さらに今回特筆すべきがオーディオ・インターフェースとしての機能！ これはMOXとコンピューターをUSBケーブルで接続することで、コンピューター上のDAWソフトの音をMOXから出力したり、逆にMOXのA/D INPUTに接続したマイクやギターなどの音や本体の音をDAWソフトに録音することができるという優れもの。MOXには、コンピューター上のDAWソフトをMOX本体のツマミやスライダーで便利にコントロールするためのリモート・コントロール機能も内蔵されているので、バンドルされているスタインバーグ社製DAWソフトウェア“Cubase AI”をコンピューターにインストールすれば、高音質でコンピューターと直接交互に音をやりとりし、MOXで曲を作り、歌やギターなどのエディットやエフェクトはDAWで作り込むという、生楽器も含めた本当の意味でのトータルな制作環境をかなりのクオリティで完成させることができる！

さらにその先へ向けての発展性という意味では、マスター・キーボード機能として鍵盤の領域を4つにわけ、外部の音源やMOX本体を別々にコントロールすることもできるので、将来さらに音源を買いつけてライブなどで弾き分けたいと思ったときもしっかり対応できる。

こんな、MOTIFシリーズの弟分（？）というにはもつたないほどの機能と発展性を持ったこのMOX。初心者はもちろんプロでも十分使って、軽くてコスト・パフォーマンス良くて……いい時代だなー（笑）。

# ヤマハMOXシリーズの魅力をGakushiが語る!

MUSIC PRODUCTION  
SYNTHESIZER

**MOX6**  
**MOX8**

取材・文:西本 熊  
撮影:鈴木千佳

ワークステーション・シンセサイザーに求められる音の良さと機能性を満たした上で、手ごろな価格と軽量性を兼ね備えたヤマハの新製品=MOXシリーズが注目を集めている。MOTIFクオリティの音源エンジンによって生み出される“使える音色”を簡単な手順で操り、心地よい感触で演奏できる——まさに楽器の基本と思える特長をバランス良く備えている点が、同シリーズの大きな魅力と言っていいだろう。ここでは、そんなMOX6/MOX8の発表イベントでデモンスト레이ターを務めていたキーボーディストのGakushiに登場願い、MOXシリーズの良さを知り尽くした上での素直な感想を聞かせてもらった。ヤマハ・ホームページ上のオリジナル・デモ曲もぜひ併せて聴きながら読んでいただきたい。

● Gakushi……15歳のころヤマハ EOS B900を手に入れてキーボードを始め、23歳でプロ活動をスタート。主にR&B系アーティストのレコーディングやツアーやに参加、ツアーではパンマスを務めることも多い。これまでに関わったアーティストはm.c.A・T、DOUBLE、AI、BoA、May J.、加藤ミリヤ、DA PUMP、三浦大知、HOME MADE家族、GAKU-MC、Skop On Somebody、東方神起、JYJなど多数。



こんなに軽くて安いのに、使いたくなる音がたくさん入っている。正直びっくりしました。

## MOTIF XFとは別の個性を感じます

● MOXシリーズを手にして、まずどういうところから試してみましたか？

**Gakushi** プリセット音色をひとつおりチェックした後、上モノ的によく使うプラスの音色でパフォーマンス（複数のボイスを組み合わせた音色セット）を組んでみるとから始めました。MOXにはパフォーマンスクライエイターという機能があって、簡単な操作でレイヤーやスプリットを作れるので、すごく良いと思いましたね。ボタンを押したらこうなるんだなというのが瞬時に分かるので、ビギナーの

人でも使いやすいと思います。慣れれば目をつぶっていても使えるんじゃないですか？（笑）その機能を使って、ライブで使えそうな音をすぐに作ることができました。

●いろいろな音色を聴いた中で、特に気になったサウンドは？

**Gakushi** 僕は割とエッジの立ったシンセ・プラスが好きなんんですけど、MOXのプラスを聴いたとき、MOTIF XFより好きかもしれないと思ったんです。スケの感じが違うんですよ。単体で聴いてそう感じただけなく、セッションでも使ってみて確認しました。全く別のキャラクターとして使えると思

いましたね。

●鍵盤楽器系の音色はどうでしたか？

**Gakushi** ピアノ系の音色はさすがにMOTIFからの流れを踏襲していて、価格帯以上の良い音だと思います。いつもツアーとかで使っているのと同じ音だという安心感もありました。チャーチ・オルガン的な音色も良いですね。僕はジャズ・オルガンとかロック・オルガンのような歪み系の音があまり好みじゃなくて、パーカッションもあり使わないくらいなので、クリーンなオルガンで良い音がするのはうれしいです。でもレスリーのシミュレーターも、回転している感じがすごく出ていて良いと思

MOTIF XSと同じ335MBの大容量波形による1,217音色を搭載したMOXシリーズは、ライブから音楽制作まで幅広いシチュエーションでの使い勝手を追求したワークステーション・シンセ。鍵盤数／鍵盤機構以外は両機種とも共通のスペックとなっている。特筆すべきは、従来の30%以上の軽量化に成功している点で、88鍵のMOX8でも15kgを切る軽さ。MOX6にいたってはわずか7kgという、本格的なワークステーション・シンセとしては驚異的とも言える軽量性を実現している。



## MOX6

価格：オープン・プライス  
61鍵セミウェイテッド鍵盤（インシャルタッチ）



## MOX8

価格：オープン・プライス  
88鍵GHS鍵盤（インシャルタッチ）

## Gakushi's RECOMMEND



◀ MOXの注目すべき特長の1つに、鍵盤の弾き心地の良さがある。MOX8に搭載されたピアノタッチのGHS鍵盤はもちろんのこと、MOX6の新開発セミウェイテッド鍵盤は、Gakushiも「61鍵シンセでここまで弾きやすいのはすごい」と驚きの声を上げるほどの出来映え。「音色ともうまくリンクしていく、弾いてて『いいぞ!』っていうのをすごく感じます」。

## Gakushi's RECOMMEND



▶ さまざまなソフトウェアが付属し、高い連携性の下に活用できるのもMOXシリーズの魅力。専用エディターやDAWソフトCubase AIをはじめとして、楽器もシーケンサーもハードウェア派を自認するGakushiが太鼓判を押したオルガン音源YC-3B（右画面）、「アクや主張もあるけど、アンサンブルにうまくなじみます」というシンセ音源Prologueがバンドルされている。

## Gakushi's RECOMMEND



▶ インタビュー中でGakushiが何度も言及しているパフォーマンスクリエイターは、MOXの使い勝手を飛躍的に高めている注目の機能。例えばボイスモードでLAYERボタンを押し、レイヤーしたい音色を選ぶと瞬時にパフォーマンス（音色セット）を作成できる。同様にスプリットや、ドラム・パートを重ねたパフォーマンスの作成（DRUM ASSIGN）も簡単に行うことが可能。演奏の手を休めずに幅広い音作りを楽しめる、うれしい機能だ。

いましたよ。オルガンといえば、付属のソフトウェア音源YC-3Bもかなり気に入りました。使いやすくて動作も軽いし、グリスしても音がグチャグチャにならなかったりしない。今までソフト音源はあまり使ってこなかったんですけど、こんなに良いんだ!とびっくりしました。

### 値段を超えた魅力が詰まった1台です

● 高密度なリバーブや、MOTIF XSで高い評価を得ているVCMエフェクトなど、内蔵エフェクトも充実しています。

**Gakushi** 僕はギタリストがない現場で歪み系のギター・パートを弾くことがけっこう多いので、デイストーションの音は注意深くチェックします。MOXには、シミュレーターっぽくない感じで豊かに歪む音があって、バッヂリだなと思いました。フィードバックも良い感じで出せるのでよく使っています。

● 価格帯的にアマチュア・ユースも重視していると思いますので、内蔵シーケンサーの使い勝手

も気になるところです。

**Gakushi** 僕自身けっこ打ち込みもやるんですけど、シーケンサーは今でもハードウェア派なんです。ハードでやる楽しさが好きなので、MOXのシーケンサーもスムーズに使えました。リアルタイム録音が全くストレスなくできただけでなく、普段はやらないステップ録音も試してみたらとても簡単にできました。これならギターでもすぐにトラックを作れますね。まさにオールイン・ワンだと思いました。

● MOXシリーズをライブで弾くと想定したときの使い勝手についてはいかがですか？

**Gakushi** やはり最初に話したパフォーマンスクリエイター機能がポイントですね。僕は特にピアノとストリングスをレイヤーして使うことが多いんですけど、それが瞬時にできるだけでなく、2つの混ざり具合いをノブで調整することもすぐにできます。最初は素のピアノの音で始まって、途中から徐々にストリングスを足していくって盛り上げる、というような使い方が簡単にできるのはうれしいです。ちょっ

とした操作の加減で、思いもしなかった面白い音色を作れる可能性もありますね。シンガーと僕だけみたいなシチュエーションではスプリットもよく使うので、このパフォーマンスクリエイター機能は重宝します。あと、僕はけっこうキーボードをたくさん積むのが好きなので、軽いというのも良いですね。車を持っていないころは61鍵のキーボードでもカートに載せて運んでいましたけど、これならリュックみたいに背負えてしまうのは魅力です。

● MOTIF XFも使っているGakushiさんですが、あえてMOXシリーズを使いたくなる場面もありそうですか？

**Gakushi** プラスのようにMOTIF XFよりも好きな音色があるというのは大きいし、さらに探ればそういう音色はまだまだあると思います。ロックやポップスなど全般に使えると思いますけど、僕が専門とするR&B系の音楽には絶対欠かせない1台ですね。こんなに軽くて値段も手ごろで、これだけのクオリティのシンセってほかにないと思います。

Demo Sound 「Le\_t Go」について <http://jp.yamaha.com/mp/>

### MOX本体だけでここまで作れるんだ、というところを体感してほしいです

今回、Gakushiが提供してくれた「Le\_t Go」は、すべてのパートをMOX8で制作したトラック。打ち込みも内蔵シーケンサーで行い、本体の出力をダイレクトに録音したという。まさにMOXの実力を体感できるこの曲について、Gakushi本人に解説していただこう。

「ドラムに関しては、普段R&B／ブラック系の音楽をやっていて、特に生ドラム系の音色になかなか満足できないことが多いんです。だいたいスネアのピッチが低くてロック／ポップスっぽくなっちゃうんですけど、MOXに入っている音はその悩みを解消してくれました。今回の曲では、Power

Standard Kit 1という音色を使っています。逆にベースはシンペでやってみようと思って、モーグ的な低音感で下を支えてくれるFat Sineという音色を選びました。ドラムもベースも、ちょっとした音の違いでグルーブが変わってしまいますけど、今回はすごく良い音が見つかったと思います。

メロディを弾いているエレピの音色はNatural Wurliey、バッキングの生ピアノはFull Concert Grand。どちらもプリセットそのまままで使いました。サビで出てくるオルガンはFullyです。

プラスはBright Section。普段ならパフォーマンスを組んで使うところですが、ここではソング・モードなので素の音色です。スパッと切れる感じ

で、とても気に入っています。

後半で味付け程度に鳴らしているシンセは、MOXの中でも特に好きなStraight RBという音で、サビのバックにも薄く入れています。プリンスの2年前くらいのアルバムにけっこう入ってたなと思うような音で、普段のセッションでもよく使います。この音だけはソリッド感を増やそうと思って、少し違うノコギリ波を足しました。

全体のバランスは、弾いているときのベロシティでほぼそろえてるので、最後に微調整したくらいです。とにかく素の音をメインにして、本体だけで作った音でもこんなにすごいんだ、というのを体感してもらえるように作りました」

# MOTIF XF Specification

※MOX6/MOX8のスペックはP.12を参照

## [音源部]

●音源方式:AWM2+アーティキュレーション機能 ●最大同時発音数:128音 ●マルチティンバー数:内蔵音源16パート、オーディオ入力パート(A/D, FW\*) \*1ステレオパート ●波形メモリー:741MB相当(16bitリニア換算)、3,977ウェーブフォーム ●ボイス数:プリセット=1,024ノーマルボイス+64ドラムキット GM: 128ノーマルボイス+1ドラムキット ユーザー=128ノーマルボイス×4 バンク(ユーザーバンク1にプリセットには無いボイス、ユーザー・バンク2、3、4にはプリセットからのピックアップ)+32ドラムキット(No.1~8: プリセットには無いドラムキット、No.9~32: プリセットからのピックアップ) ●パフォーマンス数:ユーザー=128×4音色(最大4パート) ●フィルター:18タイプ ●エフェクター:リバーブ×9タイプ、コーラス×22タイプ、インサーション(A, B)×53タイプ×8パート(計16基)、ボコーダー×1(インサーションA、Bを一組として使用)、マスター・エフェクト×9タイプ <各エフェクトタイプにプリセットプログラム搭載(計320)> マスターEQ(5バンド)、パートEQ(3バンド、ステレオ)

## [シーケンサー]

●シーケンサー容量:約130,000音 ●音符分解能:四分音符/480 ●最大同時録再音数:124音 ●テンポ(BPM): 5~300 ●レコーディング方式:リアルタイムリプレース、リアルタイムオーバーダブ(パターンチェーン除く)、リアルタイムパンチ(ソングのみ) ※ステップレコーディングは搭載されておりません。 ●トラック数:<パターンモード>フレーズトラック×16 <パターンチェーンモード>バターントラック、テンポトラック、シートトラック <ソングモード>シーケンサートラック×16(トラックごとにループ設定可)、テンポトラック、シートトラック ●ソング数:64ソング ミキシングボイス=1ソング/1バターンあたり16個(最大で256個)、ミキシングテンプレート: 32個 ●バターン数:64バターン(×16セクション)、小節数:最大256 ●フレーズ数:ユーザー・フレーズ=1バターンあたり256ユーザー・フレーズ ●アルペジエーター:プリセット=7,881タイプ、ユーザー=256タイプ ※MIDIシンク、MIDI送受信チャンネル、ベロシティリミット、ノートリミット設定可 ●シーンメモリー数:ソングごと5シーンメモリー

## [サンプラー]

●最大サンプル数:128ウェーブフォーム(マルチサンプル)、ウェーブフォームごとに256キー・バンク合計512キー・バンク ●サンプルデータビット:16bit ●サンプリング周波数:44.1kHz、22.05kHz、11.025kHz、5.5125kHz(ステレオ/モノ) <FW入力時(別売FireWire拡張ボードFW16E装着時)> 44.1kHz固定 ●波形メモリー:内蔵SDRAM=128MB ●最大サンプルサイズ:1モノサンプル=32MB、1ステレオサンプル=64MB ●サンプルフォーマット:MOTIF XFオリジナルフォーマット、WAV、AIFF

## [その他]

●鍵盤数:XF6=61鍵(FSX鍵盤)、XF7=76鍵(FSX鍵盤)、XF8=88鍵(BH鍵盤) ●操作子:ピッチヘンドホイール×1、モジュレーションホイール×1、リポンコントローラー×1、アサイナブルコントロールスライダー×8、アサイナブルノブ×8、アサイナブルファンクションボタン×2、データダイアル×1 ●ディスプレイ:320×240ドット 5.7インチ グラフィックカラーLCD(バックライト付) ●接続端子:OUTPUT L/MONO, R(標準フォーンジャック)、ASSIGNABLE OUTPUT L, R(標準フォーンジャック)、A/D INPUT L, R(標準フォーンジャック)、DIGITAL OUT、PHONES(ステレオ標準フォーンジャック)、FOOT CONTROLLER 1, 2、FOOT SWITCH×2(SUSTAIN, ASSIGNABLE)、MIDI IN/OUT/THRU、USB(TO HOST, TO DEVICE)、AC IN、ETHERNET(100BASE-TX)、IEEE1394(別売FireWireエクスパンションボード「FW16E」装着時) ●外形寸法:XF6=1,045(W)×122(H)×391(D) mm. XF7=1,252(W)×122(H)×391(D) mm. XF8=1,439(W)×168(H)×466(D) mm ●重量:XF6=15.1 kg、XF7=17.2kg、XF8=28.9kg

この小冊子はリットーミュージック社キーボード・マガジン2010年AUTUMN号、  
2011年SUMMER号の記事をもとに加筆・修正したものです。



ヤマハシンセサイザー関連ホームページ ..... <http://jp.yamaha.com/mp/>

●MIDIは社団法人音楽電子事業協会(AMEI)の登録商標です。 ●他の会社名・製品名などは各社の商標または登録商標です。 ●製品の規格および仕様は、改良のためお断りなく変更する場合がございます。  
●本カタログは印刷物のため、商品の写真と実際の色と異なる場合がございます。

## 取扱店に関するお問い合わせ先

EKB・LM 営業部 東日本営業所 〒108-8568 東京都港区高輪2-17-11  
 EKB・LM 営業部 中日本営業所 〒460-8588 名古屋市中区錦1-18-28  
 EKB・LM 営業部 西日本営業所 〒542-0081 大阪市中央区南船場3-12-9 心斎橋プラザビル東館  
 〒554-0024 大阪市此花区島屋2-6-82 ユニバーサル・シティ和幸ビル

TEL.03-5488-5471  
 TEL.052-201-5199  
 TEL.06-6252-5231 (~2011年8月12日)  
 TEL.06-6465-0251 (2011年8月22日~)

**音楽を楽しむエチケット** 楽しい音楽も時と場合によっては、大変気になるものです。特に、夜間は小さな音でもよく通り、思わずとろに迷惑をかけてしまうことがあります。適度な音量を心がけ、窓を開めたりヘッドフォンを使うなど、お互いに心を配り快適な生活環境を守りましょう。

ご使用の前に、取扱説明書に記載されている安全や取扱いに関する注意事項をよくお読みください。



## ヤマハ株式会社

EKB・LM 営業部 営業推進室 〒108-8568 東京都港区高輪2-17-11 TEL.03-5488-5430

このカタログは無塩素漂白(ECF)パルプを使用し、大豆油インキで印刷しております。

2011年7月作成 DE1251